



小説 母一人子一人

永代美知代

(下)

母機があれ程心をこめてお認めなすつた手紙に對して、東京からの返事は案外あつたやうなものでありました。
「親類と云つても、ほんの遠縁だから仕方がない」
母機は唯々息をついて仰つたばかりです。が、お初は遊學に就いては、相違らず氣を振んで、彼處を初め、幾人もの人に頼んで、せめては學費の餘暇にでも勉強させたいとお考へてした。

「さううち町の教會の牧師の世話で、お初は都の××學院に入る事になりました。亞米利加人の院長ミッソールの用事を足して、それから學費の補助を受ける都合なのです」。

ミッソールは眞のしるべにふまはしい、大層おやさしい方でした。すけれ共、老練な助手は、何處か斯うヒステリックな氣のある、馬鹿に機嫌の好い日があるかと思ふと、又非常な不機嫌らしい時もあるといった風で、世間ね田舎でのお初ば、とすれば胸をさつかせて、消え入り度い思ひをしつてました。

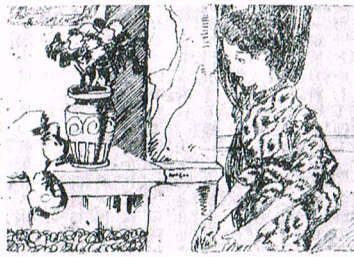
用事と云つて別段大した用事ではない、ほんのたゞ、朝夕お部屋掃除を、勉強室と部屋だけ掃除して置さへすれば好いのですけれど、田舎にゐて、つい見えた事もない條子の世話など、お初には可成りの煩苦でした。

美しい座敷だの、美しい花機などのある硬質陶器の便器を花瓶と間違へたり、知らぬ國の風俗にまづつく事ばかり多かつた。ミッソールは其度不機嫌らしく肩を寄せるのが癖でした。

「アナタ、コレ、イメセン」
言葉の通じないのも氣の毒で、お初は火のやうに顔をほてらしながら、たゞもうおごどと度々失ひました。

「どうぞミッソールの肩が寄らないやうに」
お初は毎朝、心の中で祈りました。そして

あやまちのないやうにないやうにと、そればかり念じて居りますのに、とんでもない事が出来てしまひました。
それはミッソールが大事にして居つたやうな大黒石の塑像をついた粗相で、映したのでした。
何處を如何して、そんな粗相をしたものか、考へると夢のやうで、お初は自分ながら呆れて、ぼんやりしてしまひます。
朝のうち勉強室の掃除にかゝつて、ふと見るとマントルピースの上に、ギヤモンと云ふのでせう、美しいガラスの水盤に紅黄紫とりにどりに色美しいパンサーが一面に浮かせてある。
お初は暫らく見惚れてゐましたが、いつものやうに寫眞がけを拂つたり、書物の一つ一つ



つとをとりつけて、可憐に紙巾をかけました。途端に消え、電鈴がザ、ザ、ザと鳴りました。

「ザヤ」と振り返つた丁度其時今度はボタンと音がして、見ると、塑像がマントルピースから落ちて二つに砕けて居りました。

「塑像のやうにお初は吸気な田舎にひとり淋しく暮らして、母機のお顔が、困いた。」
「お初は幾時か泣き伏しました。」
「アナタ、コレ、カワ、キサツケル、ナカナイロソク」
院長は案外やさしくお初を慰めました。併しそれ以來お初は庭事に注意深い少女になりました。(完)